

農業小学校を契機とした都市・農山村交流の意義

The Meaning of the Urban and Rural Residents' Interchange
by an Elementary School of Agricultural Practices

梅村 龍太郎 松本 康夫

Ryotaro UMEMURA and Yasuo MATSUMOTO

はじめに

農業体験を通して都市住民と相互交流を図る活動が各地の農山村で展開されている。岐阜県の旧坂下町に1994年、開校した「^{はなのこ}桜の湖農業小学校」(「桜小」)では、都市児童に「農」や「食」の楽しさを知ってもらおうと農家や元教員ら地元有志による任意団体が、行政の支援を受けず、多彩なアイデアと工夫を凝らしながら食農体験を中心とした活動を展開している。本報では、「桜小」の活動に直接参加して実態を調査するとともに既存資料から都市・農山村交流における意義を検証した。

活動概要

「桜小」は、「鍬はエンピツ、畑はノート、土を耕し、稲や野菜と大きく成長しよう」を標榜し「たがやしひとなる」を校訓とする。荒れた桑畑約2haを開墾して作られた広場と農場が教室である。Fig.1に示したように周囲を山林に囲まれ、必要最低限の設備しかない教室には、毎年3～11月、月に1度、多くの親子連れが訪れる。2004年の活動状況は、Table 1に示した通りである。授業は、午前10時から午後3時まで、夏休みにはスタッフの1人が経営する「桜の湖オートキャンプ場」でキャンプするのが恒例である。会費は小学生1人あたり¥19,000/年、他に食材費として参加者が各自¥500を払う。農作業の先生役は主に地元農家の高齢者(約20人)が担い、昼食は農場で収穫した季節野菜や旬の山菜等を用いながら地元婦人が調理した郷土料理をスタッフ(30～40人)と歓談しながら味わう。



Fig.1 農業小学校の施設配置

1に示した通りである。授業は、午前10時から午後3時まで、夏休みにはスタッフの1人が経営する「桜の湖オートキャンプ場」でキャンプするのが恒例である。会費は小学生1人あたり¥19,000/年、他に食材費として参加者が各自¥500を払う。農作業の先生役は主に地元農家の高齢者(約20人)が担い、昼食は農場で収穫した季節野菜や旬の山菜等を用いながら地元婦人が調理した郷土料理をスタッフ(30～40人)と歓談しながら味わう。

Table 1 2004年度の活動状況

月日	主な活動内容	食事	月日	主な活動内容	食事
3/28	入学式 野菜種まき・定植準備	五平餅 田舎汁など	7/18	キャンプ打ち合わせ カブトムシの運動会 野菜収穫・茶摘み・茶もみ	五目おこわ 味噌汁など
4/18	桜の湖で花見・運動会 野菜種まき・定植 カブトムシ幼虫配布 プランター・土・野菜苗配布	筍ご飯の弁当	8/21	桜の湖キャンプ・工作	メニュー豊富
5/16	田植え・パケツ稲の苗配布	おもち おひたしなど	8/22	野菜種まき・手入れ・収穫	松茸ご飯
6/20	田の草取り 野菜定植・手入れ・収穫 紙すき(はがき作り)	朴葉寿司 朴葉餅など	9/26	稲刈り・野菜手入れ・収穫 パケツ稲表彰・文集原稿配	焼き芋など
			10/17	稲の脱穀・野菜手入れ 収穫・文集原稿締め切り	栗赤飯 ゆで落花生な
			11/28	収穫祭・卒業式・文集配布	メニュー豊富

・参加児童の動向と通学圏

開校以来 10 年間に通った児童家族は延べ 906 組，実質 369 組であり，2 年継続，145 組，3 年，82 組，4 年，49 組，5 年，25 組，6 年，16 組，7 年，9 組，8 年，7 組，9 年，3 組，10 年，1 組であった。6 年以上の長期にわたり兄(姉)弟(妹)を通じて継続している家族もみられた。Fig.2 に示したように，児童家族のリピーターの多いことが大きな特徴である。

また，Fig.3 に示したように名古屋圏を中心とする児童の通学圏は，ほぼ 50 ~ 80km に及び，人口集中地区との関係を見ると全 369 組のうち 91%，337 組が居住することがわかった。

・活動の評価と意義

1994・95，98・99，2002・03 年度の卒業文集に綴られている児童保護者の感想文 157 事例をもとに，入学動機・継続意向・活動環境・スタッフ・農業体験・郷土料理・キャンプ・子供の 8 項目に分類し，評価に関連する記述を抽出した。

Table 2 に一部を抜粋して示した。周辺景観やスタッフ，地元農家の大らかな人柄や自動車の通らない安心感に加え，子供を山車にしながら，保護者が楽しめる活動内容が農業小学校の定着に大きな役割を果たしていることが明らかである。

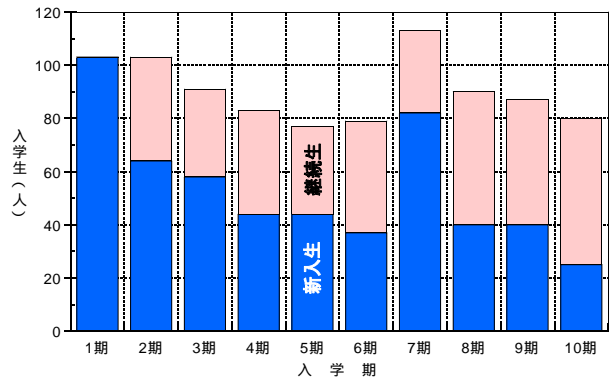


Fig.2 児童数の推移と継続状況

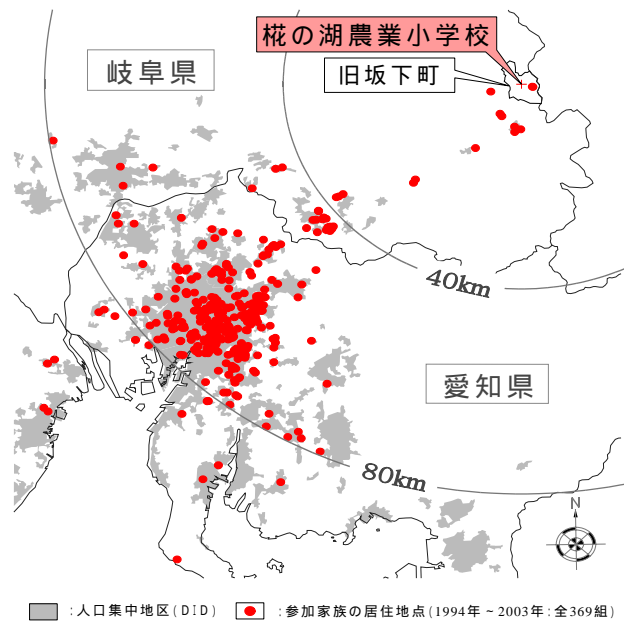


Fig.3 児童の通学圏分布

Table 2 児童保護者の評価 (感想文集から)

抽出項目	記述内容 (抜粋)	
入学動機	日頃は土や自然に親しむ機会がないため	親子共通の話題・思い出作りに
	親子共に都市育ちゆえ子供にはぜひ	親は田舎育ちゆえ子供にもぜひ
継続意向	活動が続く限りずっと参加したい	親だけでも参加したい
	来年も参加しようと子供に頼んでいる	下の子供も入学させたい
活動環境	日本の故郷そのものだと感じた	子供の頃にタイムスリップしたような光景
	車の危険がなく子供を放っておいても安心	自然に抱かれる感じがしてホッとする
スタッフ	心温まるもてなしに何より感激した	感謝の気持ちでいっぱい
	先生方の知恵や経験には驚くばかり	スタッフの生き方・繋がりに憧れを感じる
農業体験	一月毎に見る作物の成長ぶりに驚いた	除草の大切さを実感した
	有機栽培の大変さを考えさせられた	親子一緒に汗を流して作業したことが喜び
郷土料理	真心のこもった食事は一番の楽しみ	汗水垂らして働いた後の食事は最高
	電線のない空の下で食べる食事は格別	先生方とのコミュニケーションの場
キャンプ	キャンプほど強烈に印象に残るものはない	なんと盛りだくさんで豪華な食事
	星空の下でのコンサートは至福のひととき	スタッフや他の参加者と一体になれた
子供	農作業より虫取りの方が楽しかったよう	嫌いな野菜でも食べようと努力するように
	卒業後はスタッフになりたいと言っている	将来は農業をしたいと言いつけている

